

【日時】二〇一八年一月二八

があり得るのだろうか……



成り行き島の島トカラ

【講師】稲垣尚友(作家・竹大工)

日(土)午後二-四時 ※終了後新年会有り

●スノードリフト(雪の吹きだまり、吹雪)は純白オオカミの名である。命名者はアメリカ・モンタナ州の牧場主オオカミ・ハンターたちである。体長2メートルの大きなオオカミである。1917年からの13年間に千五百頭の牛を殺した。毎週二頭を殺した計算になる。また、一夜のうちに二百キロ走った記録が残っている。

●若くは一度、尻に掛かったことがあり、左前足の足指を一本だけ挟みとられている。それ以来、尻には驚くほど敏感になっていた。また、食べかけの獲物のところには二度と戻らない、いつも自分の殺した獲物だけを食

べた。だからハンターたちは毒餌を仕掛けることもできない。

●通常のオオカミは数頭から十数頭の群れをなして行動するが、スノードリフトは徹底して孤独を守り通した。そのため、群居がもたらす盲目的な模倣行動がない。

●スノードリフトがロシア産のオオカミ狼犬ホルゾ 45頭に追跡されたことがある。そのとき、スノードリフトは狼犬を山奥に誘い込んで、そのリーダーを殺した。リーダーが倒されると、他のオオカミは尾を巻いて逃げた。それ以降、狼犬を使っても追跡はできなかった。鹿利島の罾師(トラッパー) 2人

がスノードリフトとの知恵比べに挑んだ。

●スノードリフトの知能の高さにはおどろかばかりである。最終的には1930年に撃ち殺されたのであるが、それはトラッパーの知能が優れていたからではなく、スノードリフト自身の肉体の衰えが原因であった。バッファローを初めて野生動物を絶やすことは、ネイティブ・インディアンの根絶を目指し開拓者たちにとって、欠かせない作業であった。兵糧資材にし、生活環境を破壊することに繋がっていたからである。これらの情報は藤原英司氏の『アメリカ動物滅亡史』から得たのであるが、読み進むたびに、気

がつかば、いつの間にかスノードリフト自身になっていく。

●インディアンに対するアメリカ植民者ばかりではない。ヤマト政権が在来民を駆逐していく過程は、奈良時代の地誌である『風土記』にも著されている。沖繩や奄美に対する本土の視線は、薩摩藩の統治していた時代のなごりを今なお根強く引きずっている。トカラの島々に対してはどうかだろうか。47年前にいったいどの補償を受けなかった。鹿島を余儀なくされた臥龍島民は、辿り着いた先で、丸山真男氏が『成り行き島』の民日本人として、生きているのだろうか。スノードリフトに代わってみたい。(講師記)

会費

講演：持てる者は持てるだけ(カンパ制) / 懇親会：2500円前後

場所

武蔵野市本町コミュニティセンター第2会議室(3F)
 東京都武蔵野市吉祥寺本町1-22-2 / 吉祥寺北口(JR中央線・井の頭線)徒歩3分 ※トカラ塾の会場は吉祥寺です。

参加連絡

050-7542-2018 (稲垣一雄)
 info@tokarajuku.sakura.ne.jp
 ※懇親会のみ参加の方は上記アドレスにご連絡ください。

主催

文化結社トカラ塾 (<http://www.tokarajuku.sakura.ne.jp/>)

